

- ◎家畜伝染病の防疫対策にしっかりと取り組もう。**
◎公共牧場の有効活用と自給飼料の安定確保を進めよう。

乳用牛

◇ 分娩時の事故防止

1 分娩直前の飼育環境

分娩予定牛は清潔で寝起きがしやすい環境で飼育する。やむを得ず繋いだままで飼育する場合は、敷料を十分に敷くとともに、尿溝を鉄板等でふさいで子牛の転落を防ぐ。

2 分娩時の対応

分娩は、強い陣痛、一次破水、足胞(子牛の足が透けて見える胎膜)の形成、二次破水の順で進行するので、次の点に注意する。

- (1) 一次破水が起きた後、1時間以上経過しても足胞が見られないときは、陣痛微弱や子宮捻転を疑う必要がある。
- (2) 足胞形成時の胎膜は、産道を開くのに必要であるため、人為的に破らないようにする。足胞が見られた後、30分以上経過しても分娩が進まないときは、子牛の失位や低カルシウム血症を疑う必要がある。
- (3) 二次破水後も十分に産道が開いていない時は、けん引すべきではないが、2時間程度経過しても進まない場合は、産道から消毒した手指を入れて子牛の状態を確認する。

肉用牛

◇ 繁殖牛の退牧後の飼育管理

1 飼育管理

- (1) 舎飼い開始時は、配合飼料の量を徐々に増やすなど、飼料を急に変えないようにする。
- (2) パドックでの運動や日光浴、ビタミン剤の給与等により良好な発情回帰に努める。
また、朝夕は牛を必ず観察し、発情を見逃さないようにする。
- (3) 授精後60日をめどに妊娠鑑定を受け、1年1産に努める。
- (4) 配合飼料の増飼いは、分娩2か月前から概ね離乳までの期間に実施する。給与量は、牛のボディコンディション(栄養度)を観察しながら加減し、牛を太らせすぎないようにする。
- (5) 蹄の伸び過ぎは、牛のストレスや、蹄病をはじめとした疾病を引き起こす恐れがあるため、削蹄を適切に行う。

2 疾病対策

(1) 子牛の下痢、肺炎の発生の多い農場では、消毒の実施や換気の改善等の対策を行うとともに、母牛へのワクチンの活用も検討する。

※実施方法等については、獣医師や家畜保健衛生所に相談すること。

(2) 農場内への病原体の侵入を防ぐため、適切な消毒の実施や毎日の健康観察、飼養衛生管理基準の順守に努める。

豚

◇ 冬期間の飼育管理

- 1 子豚の最適環境温度は、分娩直後から生後1週までは30℃、生後2～3週で25℃、生後2～3か月で20℃、成豚は15～18℃である。特に、離乳直後の子豚は、母豚からの給温がなくなるため、30℃程度の温度が必要となるので注意する。
- 2 寒気による発育の停滞や飼料効率の低下を防ぐため、すきま風の防止や適切な保温など防寒対策を徹底する。
- 3 すきま風の防止には、扉へのくぐり戸の設置や透明ビニールの「のれん」を下げるなどの方法が有効である。また、スノコ式豚舎では除ふんピットからの冷気の侵入防止のために、排せつ口等にカーテンを下げるなどの工夫をする。
- 4 新生子豚は極端に寒さに弱いため、保温箱の設置のほか、床に稲わら等を敷いて保温する。
- 5 防寒対策のために豚舎を密閉状態にすれば、呼吸器病のリスクが増加するため、室温を確認しながら換気を行う。

鶏

◇ 高病原性鳥インフルエンザ等発生防止対策

渡り鳥が飛来する季節になり、本病発生のリスクが高くなるので、発生予防のために次のことに注意する。

- 1 野鳥やネズミなど野生動物の鶏舎への侵入防止を徹底するとともに、野生動物の排せつ物が飼料や水に混入しないように注意する。
- 2 ウイルスを舎内に持ち込まないよう、鶏舎の出入口に踏込み消毒槽を設置して消毒を徹底する。また、鶏舎毎に専用の作業衣、作業靴等を着用する。
- 3 部外者や車両の農場立入りは原則として禁止し、車両等の出入りが必要な場合には消毒を徹底する。また、出入りの情報を記録し、少なくとも1年間保存する。
- 4 異常鶏の早期発見に努める。異常鶏が認められた場合は、最寄りの家畜保健衛生所に速やかに連絡し、指導を受ける。

草地・飼料作物

◇ 越冬前の草地管理

- 1 造成後3年以上経過した草地は、酸性化が進み、土壌中のミネラル含量が低下していることが多いので、土壌診断をした上で石灰や苦土等の土壌改良資材の施用に努める。
- 2 早春の追肥が遅れがちな放牧地などでは、終牧後に追肥を行う。

◇ たい肥の適正利用

- 1 たい肥は十分腐熟させて生産用肥料資材及び土壌改良資材として積極的に草地・飼料畑に活用する。
- 2 たい肥の肥料成分は畜種、副資材、処理方法などによって大きく異なるので、あらかじめ成分含量を把握した上で適正に施用する。
- 3 草地に対するたい肥の施用量は10a当たり2～3t程度とし、肥料成分に応じて翌春の化学肥料の量を減らす。
- 4 サイレージ用とうもろこしの作付け予定ほ場に対して、秋のうちにたい肥を散布・耕起することにより、翌春の作業競合が回避される。たい肥の施用は10a当たり4～8tの範囲とし、施用量に応じて翌春の化学肥料を減らす。

◇ とうもろこしサイレージの開封

- 1 サイロ開封時にはカビの有無を確認し、カビが発生した部分は廃棄する。また、サイレージを給与した家畜に食欲不振、下痢等のカビ毒症状が見られる場合には、カビ毒吸着剤を投与する。
- 2 サイレージは水分含量を測定し、乾物給与量を正確に把握する。また、飼料成分を分析し、飼料設計に活用する。
- 3 サイレージが二次発酵し、発熱した場合は、表面から60cm程度を廃棄し、 m^2 当たり600gのプロピオン酸を水で2～3倍に希釈して散布する。その後、サイロを再密封して15～20日間放置し、安定させる。

◇ りんごジュース粕サイレージの調製・給与

- 1 りんごジュース粕の入手は秋から初春に限られるので、サイレージに調製して貯蔵する。
- 2 良質なサイレージを調製するために添加物を加え、水分と養分のバランスをとる。添加物はルーサンペレット、大豆粕、ヘイキューブ又はふすまが適当であり、添加量はりんごジュース粕の10～15%とする。

環境保全

◇ 良質たい肥の生産

- 1 家畜排せつ物の通気性を確保（水分調整）する。
- 2 家畜排せつ物内部に空気が届くようにオガクズ、モミガラ、稲わらなどの副資材や戻

したい肥等を添加し、重さが10リットル当たり7kg以下になるようにする。

3 切り返しを月に1～2回実施すると、概ね5か月で完熟たい肥が生産される。

※容積重の測定法：容器いっぱいにご糞副資材混合物を、力を加えずに詰め、容積（リットル）当たりの重量（kg）を算出する。

表 たい肥化発酵に必要な水分及び容積重

畜種	副資材不使用	戻したい肥混合	オガクズ混合	モミガラ混合
牛	65%以下	68%以下	72%以下	75%以下
豚・鶏	55%以下	58%以下	62%以下	65%以下

※上記水分のたい肥原料の容積重はいずれも7kg/10リットルになる